
茸漫談

木野目理兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茸漫談

【Nコード】

N8623F

【作者名】

木野目理兵衛

【あらすじ】

茸の観察を趣味とする大学生オーリー・伍藤の元に、深夜、エルフの少女が尋ねて来た。

アイチ トヨハシ 愛知県豊橋にある私立の大学へ通っている学生にして、^{イギリス} 詠国と日本^{ホッ}という東西の二大島国の血を引く割に、どちらかというと地中海的気質を持った、陽気で少し空気の読めない男、オーランド・伍藤^{ゴトウ}、通称オーリー（この名前とその出身地から、あの有名なエルフの弓使いを演じた俳優を連想する人がいるかもしれないが、それは直ぐに止めた方がいい。彼の外見は金髪碧眼などでは毛頭無く、ぱっと見は純日本人なのだから）の趣味の一つは、彼の人間性程に変わって、茸の観察である。

主な活躍の場所としているのは、都市部から僅かに離れた場所にあり、敷地内の至る所に多くの緑が広がる大学校内で、オーリーはそこに存在するおよそあらゆる種類について精通しているのだという。作者も一度、校内にある茸を写真に撮って、ファイルに収録したものを見せて貰ったが、なかなか見物だった。

何故彼がそのような事を趣味としているのか、その理由を一度聞いた事があつたけれど、残念ながらもう忘却の彼方へと去って行ってしまうている。僅かにある記憶の断片によると、某農業大学を舞台にした漫画を読んで、だった気がする。本当かどうかは定かでは無いが、詠国とは何ら関係無かった筈である。

ともあれ、オーリーと茸の関わりについては解って頂けたに違いない。

さて、そんな彼が下宿先の一室で、デジカメに撮った写真を印刷していた時の事である。

トントンと古風にも扉を叩く音が聞こえ、オーリーは作業を止めた。縁の太い眼鏡を掛け直しつつ、縮小された茸の写真が並ぶパソコンモニタの右脇を訝しそうに見る。小さく表記された時刻は、夜

の十一時。誰かが尋ねて来る様な時間帯では最早無い。親しい知人友人の類なら在り得るけれど、今日来るといふ連絡は受けていないし、親しき仲にも礼儀あり、とは良く言ったものだ。何にせよ常識であり、何処のどこか知らないが、これはちよつとお灸を据えてやらねばなるまいなあ。彼は一人頷くと、おつちらと立ち上がり、まだトントンを続ける扉目指して歩み寄った。ドアノブを廻して手前へ引くと、行き成り開け、

「ナンジャワレエドコノクニノモンジャコノヤロウイテマウゾオラア！」

本人は『電字都市』千葉界隈の『ネオン菊の息子達』を出来る限り真似てドスを効かせたつもり、実際は頑張り過ぎちゃった余りとても聞けたものではなくなった台詞を、まだ見ぬ来訪者へ向けて叫んだ。

直後に、ひつ、と息を飲み込んでそのまま止めた声が、オーリーの足元から耳元へ届く。

おやと思い、彼が視線を下へ向けると、そこには小柄なエルフの女性、というよりも少女が、尻餅を付いて震えているでは無いか。大きく開かれた青い瞳は涙で潤み、その長細い両耳は、丁度小動物がそうする様に、しゅんと垂れ下がってしまっている。色の薄い唇はずつと小刻みに動いており、よくよく耳を凝らすと、日本語と詠語が混じった混在語で謝罪と反省と救援を告げていた。

何だか知らないが、どうやらちよつとやり過ぎてしまったらしい。内心あちゃーと思いながら、オーリーはごほんと咳払いすると、口元を吊り上げながら、何もしないから大丈夫、と手を差し出す。

少女は一瞬びくつと肩を震わせ、今にも駆け出しそうな様子を示したが、しかしその笑みと開かれた手に気付くと、警戒を解いてその掌を掴んだ。引つ張られ、立ち上がったから、スミマセン、と言置き、

「イキナリだったのでビックリしまシタ……本当に、ヤクザさんじやナイデスカ？」

そう片言で尋ねる。まさかそこまでの反応が示されるとは思ってもいなかったオーリーは己の演技力にちょっとした自信を感じていたのだが、笑って頭を掻くと、ドウモドウモと、実に軽い感じで挨拶した。

「ヤクザだなんてとんでも無い。僕は一介の学生で、オーリー・伍藤と言います、どうぞヨロシク」

「嗚呼、と……レベッカ・サンシーカーと申シマス、こちらこそヨロシク、デス」

そんな彼の態度に釣られたのだろう、少女はレベッカと名乗ると、握ったままの指にそっと力を込めた。

そうして名乗り合ってから、彼女はまずこの様な時間に訪れた事を詫びてから、にも関わらず、可及的速やかに解決すべき問題があり、それをどうにかする為に、オーリーの元へやって来たのだという。

更に聞けば、レベッカはやはり彼が見て取った様にエルフであり、もっと言えば同じ大学へ通っている、留学生だった。一ヶ月程前、詠国から空を越えて、日本語と日本の文学を学びに来たのだ。ただ、喋り方や初対面の反応を見るに、まだまだ勉強不足というより他なるまい。幾ら突然とは言え、オーリーを見てヤクザとは、後者の方々が激怒する。

でもその行動力は素直に凄い。レベッカの長く尖った耳をちらちらと見ながら、話を聞いた彼は思った。

混血と言っても、オーリーはこの国の二十醒紀半ばかりの傾向を反映して、日本産まれだ。詠霧^{イギリス}趣なんて一度も行った事は無い。行きたいと思っている間に、二十二年間が過ぎてしまっていた。

それに種族。彼女達の様な、かつては伝説、御伽噺の中の住人であつた者達……それに似ている、というだけの話でもあるが……は今やヴェールを脱ぎ、日常社会で普通に暮らしている。流石に『混在都市』^{アフルシティ トウキョウ}塔京とは比べられないが、豊橋にだって彼等、しばしば保因者と呼ばれる者達は大勢居るのだ。事実、オーリーの友達の中に

も、保因者は居る。見た目はさて置き、愉快な連中だ。

ただ、その中に属する美貌と長寿と長耳を特徴としたエルフ種は、非活動的な精神構造を有している。数百年の寿命を持ち、変化が乏しい体に永遠と思える深い森の中で暮らしていた結果、物事に対する執着を無くしてしまったのだ。かつてオーリーは、そんな事を何かの本で読んだ事がある。しかし、それでも生きて行く為には何か一つ位、熱中出来る物事が必要のようで、彼等の多くはその二大種族特徴に関心を置いている。中には生産に興味を示す者も居たし、歴史上を見れば、無謀とも取れる情愛に身を耽る者も居た。有名どころだと、西部の伝説『大鴉』^{ネバーモア}の元愛人にして女旅行家、ローラ・ナルリル辺りだろうか。

兎にも角にも、この島国に来るには、何か常人には計り知れぬものがあつたのは想像に容易い訳であり、オーリーは、このエルフの少女……学年で言えば彼の一つ下だそうだが、果たして実年齢は幾つなのか……が持っているという熱意が、とても気になった。並々ならぬものであると思うのだが。

レベツカは、しかし彼の内心を他所に、留学生らしい何処か落着きの無い態度で、じつとオーリーの瞳を見据えながらに言った。彼の後輩から、ここを教えられたのですが、と前置きした上で、

「アノ、私は今、フェアリー・バターを探しテイルのですが、何処にあるのか知りマセンか？」

「フェアリー・バター？ 何ですそれ」

彼は腕を組むと、首を傾げ、眉根を潜めた。妖精のバターなんて聞いた事が無い。こんな夜遅くに何を目的で、と思っていたら、意味不明の言葉が出て、オーリーは戸惑いの表情を見せた。

対するレベツカは身振り手振りで何とか伝えようとするのだが、「料理に使うのデス。アノ、スープとかに入れるとトモ味良くナルのデス。黄色クテ、チョットどろどろシテテ、熱与えナイと、毒アリマスが、ケド、私達の大好物なのデスよ。イギリスでも、余り無カッタですが、コッチだと、モット無くて、困つてルのデス。明

日、私の家族が突然来るト力言い出しマシテ」

ちつとも要領を得ない説明で、オーリーはますます困惑するしかない。黄色くてドロドロしていて毒があつてスープに入れると美味しくて詠国でも珍しいが日本だともつと無い妖精のバター、等と言われても、逆にこちらが、何処にあるんですかね雪印製ですか？と、聞き返したい気分になってしまう。

とは言え、そこではつきりと言つてしまわないのが、オーリーという男である。

彼は顔を顰めて、うんうんと悩んだ。顔には、期待と不安に満ち溢れた視線がずっと送られている。レベツカ自身、こんな時間に訪れた不躰さを解つてはいる筈だ。それは、話している間に何と無く感じられた。決して悪い人間では無い、と思う。そんな彼女がわざわざ夜遅くに出向いた辺り、余程その妖精のバターが欲しいのだろう。恐らくは家族の為に。健気な話では無いか。ならばそれに応えてやらねば。

それに、彼女の容姿は、流石エルフというべきか、お世辞抜きに言つても抜群である。

オーリーも男（二重の意味で）には違いない訳で、彼は必死になつて思考し、記憶を漁つた。

だが、どれだけ捻ろうと、レベツカが見詰めようと、出ないものは出ない。何と無く、フェアリー・バターという言葉に覚えがあつた様な、無かつた様な気がして来ないでも無いのであるが、それだけだ。肝心の部分は全く出て来ない。さてどうしたものかとオーリーは弱つてしまった。

が、そこで黙らないのも彼であり、如何に適當とは言え、解答を示してやるのもまた人間性だった。

オーリーは、御免ちよつと解らない、と告げてから、でも、と付け足して、

「輸入雑貨取り扱っている店なら、もしかしたらあるかもしれないねえ。駅前通りの店とかさ」

「雑貨屋さん？ ソナ所に置いてあるのデスか？」

応えたのであるが、それは思いの他、彼女の琴線に触れてしまった様だ。余程情報に飢えていたのだろう、レベツカは掴みかからんばかりにオーリーの元へ擦り寄った。

「ちよー、ちよつと待って待って、タイムタイム。僕はあるかも、って言うただけで本当かは知らないよ」

間近に感じられる柔らかい体と、水と光溢れる心地良い森林の様な香りに心音を響かせながら、彼は一步退いた。まさかこれ程の反応をされるとは思ってもいなかったのである。

ただ、昂っていた分、落差も激しかったのだろう。そうですか、と言って、彼女は視線を下に向けてしまった。オーリーは心の中で、しまった、と舌打ちしてから、慌てて口を開くと、

「いや、でも、知り合いなら知ってるかもしれない……ええっと、」

掌を前に突き出して、誰か居ない者かと、再び思案し始める。海外関連に強い知人は何人か居り、後輩の一人には詠火文学を専攻している凄く奴が居るが、ただ妖精の、というのは少しお門違いな気もする。確かに文学としての妖精の歴史は長いが、実在するそれは、固体の絶対的な少なさにより、最近になって漸く研究が始められた。生憎と、科学畑の者は乏しい。では、バターから、当たってみようか。自他共に料理人と認める男も知っている。が、真つ当な食材とは思えぬそれを知っているかは、また別問題だ。

再度向けられる視線を受け止めつつ、オーリーは、嗚呼でも無いこうでも無いと考え続け、そうして最後に、一人の適任者を思い付いた。その手の胡散臭い、実用性の無い知識を持つ後輩。

「そつだそつだ。浜田^{ハマダ}って奴だったら、そついうのに詳しそつだよ」その名を上げてから、彼は、なかなかこれは良い人選を言ったのではと、我ながら鼻高々となった。

所が、である。レベツカは、言っても良いのかどうか迷っている様な複雑な表情を示して、

「アノ……多分、同ジ、人だと思ひマスが、私、ソノ人から、貴方

を紹介されたンデス、『先輩ダツタラ、まず間違いナク、知ってイ
ルでしょうカラ安心してくだサイ』って……」

こんな事を言うものだから、オーリーは目を見開いて聞き返した。
「ええ？　ち、因みに聞くが、そいつの名前は、」

「ハイ、剛さん^{タケン}、言つてマシタ」

そうして出て来た名は予想通りのものであり、やっぱりかあ、と
オーリーは呟いてから、何時も頬を吊り上げて笑っている語り屋も
しくは騙り屋の姿の事を脳裏に浮かべ、

「何だよああの野郎。そんなの知ってる訳が無いじゃないか、こっ
ちに振られたつて困るわ！」

「……スミマセン、ゴ厄介ばかり掛ケテしまつて……」

と、そう毒づけば、それを見たエルフの少女は、またまた肩を垂
らしてしゅんとなつてしまふ。心ならずも言葉を発してしまつた口
を閉じつつ、いやいやそれはいいんだが、と彼は慌てて弁明した。

だが、こうなると、他に誰が解るだろうか。知り合い連中に片っ
端から電便^{メール}で聞き回るという手もあるけれど、それでは時間が掛か
るし、ちよつとした手間だ。もう素直に電字の海に頼つてしまふの
が正解か。時代が産み出した一つの宗教、神話と言えるレベルにま
で間違いなく達しようとしている代物に。しかし、ここまで来て安
易極まりない手段^{ツール}に飛び付くというのも癪な話ではある。

そこまで考えて、オーリーはふと疑問を持った。レベツカは、ど
うして最初に電海^{ネット}を使わなかつたのだらう。いや使つても見つから
なかつたからこそ、なのだろうが、では、浜田は、彼女に彼を教え
た男はどうか。彼が調べても、結局解らなかつたのか。仮令そうだ
としても、何故あの後輩は、オーリーだつたらまず間違いなく知つ
ている、など言つたのか。断言出来るという事は、彼にはフェアリ
ー・バターなる代物の正体に気付いていたという事である。それは
つまり――

「あー……あのさあ。一つ聞きたいんだけどいい？」

「？　ハイ、何でしょうカ」

考えて見れば簡単な答えだった。確かに勘違いし易い名前であり、良く思い返せば、こちらの知識を一方的に当てにした上で明確な主語を抜かしていた。それでも何故最初にそこへ至らなかったのか不思議である。が、それは兎も角、答えは解った。

「その、フェアリー・バター？　だっけ？　普通、何処で採れるの？　牛の乳から？」

「マサカア！　フェアリー・バターは当たり前二、森の中で採れマスよ」

尋ね掛けた問いに返って来た答えは想像していたものそのまま、オーリーはぐつと拳を握り上げた。

それから彼は一度部屋に戻ると、愛用している茸の図鑑を持って、レベルカの所に来た。先に上げた性質を元に頁を捲って行けば、道中で彼女が、コレですコレ！　と甲高く指向けるものがある。

その茸の説明を見て、オーリーは、フェアリー・バターに覚えがある理由が解った。彼が正式の学名と通名で記憶していたある茸の、ウェールズ地方に置ける別名がそれだったのである。ついでに言う、それは河豚の腸の様に、一般的には食用として使われていない類のものでもあった。たとえ茸の事と解ったとしても、最初に料理に使うと聞いていたのでは、ちよつとこれは出て来なかったかもしれない。

ともあれ、名前が解れば、そこは茸観察を趣味とする男。嗚呼そういえば、と取り込み最中の写真に目をやれば、案の定、その中にフェアリー・バターと称される黄色がかった茸が見つかった。それは校舎の側に広がる林の中であり、そして彼の写真には具体的な撮影場所がしっかりと記載してある。

灯台下暗しというか、木を、いや、茸を隠すならば森の中に、というか。意外に身近な所で生えている事が解り、それを教えてやると、レベルカは飛び上がって喜んだ。

オーリーも合わせて喜んだが、隣室からの苦情により、二人は声

を消して、両手を挙げあつた。

レベツカは、彼に一言礼をすると、また改めてお返しをしに来ると言つて、去つて行つた。

彼女が現れたのはその明後日の事であり、手には鍋を握つていて、「コノ前のお詫び、ジャナシ、お礼に、特製スープ持つて来マシタ。作り方ハ、秘密ですよ？」

蓋を開けて見ると、ジャガイモやポアロ葱等と一緒に、一見して毒があると思わす黄色の茸が入つたスープが、少し独特の香りと共に湯気立ち、オーリーの眼鏡を曇らせる。

正直な話、この茸が本当に食べて大丈夫なのか（図鑑曰く、発熱、嘔吐、下痢等々の症状有）心配だったが、流石にそれを口で伝える事はせず、彼は在り難く頂戴した。

が、一口食して見て、それは全くの杞憂である事が解つた。確かに変わつてはいるが、十二分に美味と呼べるもので、どう調理したのか、毒茸は濃厚で、とてもクリーミーな味わいがした。一緒に持つて来てくれたエルフ名物の焼き菓子レンバス共々、オーリーは美味しく頂かせて貰つた。

そしてこれを機会に、レベツカは大学内へ、或いは下宿先へ度々訪れ、何かの手料理を差し入れた。どうも彼女はエルフの中でもエサスロンと呼ばれる類の者で、非常に世話好きで有名ならしい。ちよつとした事で悪いなあとは思いつつ、しかし頻繁に来る彼女に、オーリーは悪い気はしなかった。寧ろその逆だと言つて良いだろう。実は完全なる夜行性である事を抜かせば、性格も容姿もピカイチなのであるから。

そんな幸福な日々を過ごす傍ら、オーリーには唯一釈然としない事があつた。それは浜田の事であり、悩んでも明確な解答が得られなかつた彼は、直接本人に聞いて見る事にした。

「おい浜田あ」

「嗚呼何ですかいゴトー先輩？」

「お前この前レベツカさんに俺の所へ来る様に言つたろ？」

「ああ、言いましたねえ。良い人でしたと笑ってましたが、そいつが何か？」

「いやあ、何で電話や電便じゃなくて、突撃御宅訪問させたのかな、と思つてね」

「嗚呼、はいはい、それですか。いや、大した事じゃないんですけどね」

と、浜田はくつと片唇を吊り上げながら、

「先輩、何時か言つてたじゃないですか、エルフ耳ついていーよなーとか何とか」

「んう？ あー、そんな事も言つたかな」

「レベツカ・サンシーカーはエルフです」

「うん」

「それも種族のご多分に漏れず、実に可愛い」

「ああ、そうだねえ」

「そんな彼女とお知り合いに成れるチャンスは少ないでしょ？」

「ん？ んう、ま、そうなるか……」

「だから作つてあげたのですよ、他ならぬ先輩の為」

「ふむ……」

「しかも夜に。いや男と女のアアンコリヤコリヤには相応しい時間だ」

「……」

「『珍』種の茸を探しに来た娘へ、僕の茸をマッシュアップ、」

オーリーが、この男にこれ以上喋らせない為、その首を狩りに行つたのは言つまでもあるまい。

（後書き）

この作品の主人公のオーリー氏は、実際にいる大学の先輩を元にしました。エルフ耳がいいねと言った彼の為に今回この様な作品を描いてみたのですが、どう言ってくれるか心配です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8623f/>

茸漫談

2010年10月8日15時49分発行